

聾史研究の国際学会に参加して
—第9回国際聾史学会エディンバラ大会—

佐々木 順 二

VISIO No.45

九州ルーテル学院大学
Kyushu Lutheran College

December 2015

国際学会参加報告

聾史研究の国際学会に参加して
—第9回国際聾史学会エディンバラ大会—

佐々木 順 二

On Participating in the 9th Deaf History International Conference in Edinburgh

Junji Sasaki

I はじめに

国際聾史学会 (Deaf History International) は、聾史研究に関する国際的ネットワークであり、同学会は1991年アメリカ合衆国ワシントンD. C. で第1回大会を開催して以来、3年に1度のペースで大会を開いている¹。去る2015年7月14日～18日、スコットランドのエディンバラにて第9回大会が開催され、筆者は、初めて本学会の大会に参加した。参加者はヨーロッパ、北米からの参加者を中心に約90名で、日本からの参加は私を含め2名であった。

筆者の研究関心は、聾教育の理念、方法の変遷が卒業後の聾者の生活像とどのように関係してきたのかを、日本を中心として、各国の歴史的・社会的・文化的文脈の中で明らかにしていくことである。教育の歴史は、教育に携わる側の視点で書かれることが多く、250年もの歴史がある聾教育の歩みを綴った書物もまた、聾教育の専門家ないし障害児教育の専門家の立場から書かれてきたものが多いのではないだろうか。

しかし、歴史のリアリティは、その時代・社会を生きた多様な人々がもつ固有の視点に立つてこそ明らかになるとするならば、聾教育や障害児教育の専門家の視点からおこなわれてきた歴史研究にも制約があったと考えられる。障害当事者による歴史研究の意義は、このような専門家主体の歴史研究の制約を超え、埋もれてきた史実の掘り起しだけでなく、歴史を生きた人々のリアリティに即した新しい歴史像を提起していく点にある。国際聾史学会も、このような障害当事者が主体となった研究の土台となっていると考えられる。

本稿は、第9回国際聾史学会の全体としての運営の様子、大会テーマとプログラム内容、印象に残った発表内容について、その概要を報告し、聾者による聾史研究及びその国際学会の存在意義について考察をするものである。

Ⅱ 第9回国際聾史学会 (9th Deaf History International, Edinburgh, 2015) の大会運営について

1 大会組織委員会について

第9回大会は、イギリス聾史学会 (British Deaf History Society) とスコットランド聾史学会 (Deaf History Scotland) の共催により開かれた。大会組織委員会の会長は、イギリス聾史学会の会長でもある John A. Hay氏が務めた。John A. Hay氏は、1993年のイギリス聾史学会の創設者の一人で²、国際聾史学会の設立準備委員会のメンバーの一人でもあり、前・国際聾史学会の会長である。また、大会組織委員会の執行役員には、スコットランド聾史学会から、Lilian K. Lawson氏が加わった。大会組織委員会の運営には、やはりイギリス聾史学会のメンバーで、現・国際聾史学会会長である Peter W. Jackson氏も加わっている。

大会組織委員会のメンバーには少なくとも1名の聴者が含まれている。それはエディンバラ大学教育学部 (Moray House School of Education, The University of Edinburgh) のスタッフで、聾教育を中心にインクルーシブ教育・特殊教育および学習支援に関する教育研究に従事する Rachel O'Neill氏である。O'Neill氏は、大会の発表原稿の集約の担当者の一人であった他、発表と質疑における司会・進行の一部も担当した。

2 大会会場について

エディンバラ大会の会場は、エディンバラ大学 (University of Edinburgh) のポロック・ホールズ・キャンパス (Pollock Halls Campus) 内の、ジョン・マッキンタイア会議センター (John McIntyre Conference Centre) であった。会議センターには、食堂、売店、バーがあり、同キャンパスは、会議センターを中心にいくつもの宿泊用の建物で占められていた。

国際聾史学会の参加者の多くは、この宿泊施設で寝泊まりし、会議センターの食堂で三食を採ることができた。研究発表における質疑だけでなく、食事を取りながら、あるいはバーで語り合いながら、参加者同士がコミュニケーションをとり、意見交換をすることができる環境であった。

会議センターは、研究発表がおこなわれる大ホールの他、書籍販売、聾に関するスコットランド協議会 (Scottish Council on Deafness) やイギリス聾者協会 (British Deaf Association) を紹介するブースのあるコンコース、コーヒーブレイクのできる談話室があった。

3 使用言語と通訳について

大会の使用言語は、発表者によってイギリス手話 (BSL: British Sign Language)³ と国際手話 (International Signs)⁴ が用いられた。スコットランドを含め、イギリスからの発表者や質問者は、イギリス手話で発信および受信をし、それ以外の国の話者の多くは、国際手話で発信および受信をした。

2つの言語は、異なる言語体系をもつものであるため、両者を媒介する通訳が必要となる。こうした通訳は、これまでの大会でも必要とされ、何らかの形でおこなわれてきたと思われる。その方法には、開催国の手話と国際手話を解する聾者が通訳するもの (一つの手話言語を見て他の手話言語に置き換える)、開催国の手話を英語等の音声言語を媒介して国際手話に置き換えまたその逆もおこなうというもの、参加者が自国の手話通訳者と共に参加するというものなどである。

今回については、イギリス手話と国際手話とを音声言語（英語）が媒介する形で通訳がおこなわれた。

例えば、イギリス手話による発表・質問は、それを読み取るイギリス手話通訳者によって英語に置き換えられ、それを別の通訳者が国際手話にして全体に伝える。国際手話による発表・質問は、国際手話通訳者によって英語に置き換えられ、それがイギリス手話に通訳される。セッション会場の発表者と通訳者の位置は、図1のとおりである。

研究発表に対する質問は、参加者全員が手話を見られるよう演台に上がってなされる。図2は、そのような一場面を再現したものである。イギリス手話による発表に対して、外国の聾者が国際手話で質問をしている。国際手話の通訳者がこの質問を読み取って英語に置き換え、壇上のイギリス手話通訳者がイギリス手話に置き換える。したがってこの場面では発表者は、二重の通訳を介して質問の内容を理解しているのである。

筆者は、イギリス手話も国際手話も解さないため、発表や質疑の内容の理解は、英語の音声による媒介があることで可能となった。

発表者の中には、例えば、オランダから参加の聾者は、自国の手話通訳者とともに参加し、オランダ手話と英語との変換をしてもらうことで、十全な参加を確保していた⁵。一方、アメリカ合衆国から参加した聾者の発表では、同国から参加したアメリカ手話を解する聴者2人が、アメリカ手話と英語との間の通訳を担った。

4 通訳者集団

研究発表および質疑の通訳者は、国際手話と英語の間の通訳者が3名、イギリス手話と英語の間の通訳者も3名であった。

この他、聾に関するスコットランド会議のブースにも手話通訳者がおり、コンコースでの参加者との会話で助けてもらう場面、オプションのプログラムで通訳してもらう場面があった。

5 学生ボランティアスタッフ

大学生及び大学院生のボランティアスタッフが、大会の運営を支えていた。研究発表の会場係、道案内、書籍販売などの仕事の他、時々手話通訳も行い、私も助けてもらった。このボランティアたちは、ヘリオット・ワット大学 (Heriot-Watt University) のイギリス手話の学士課程及び

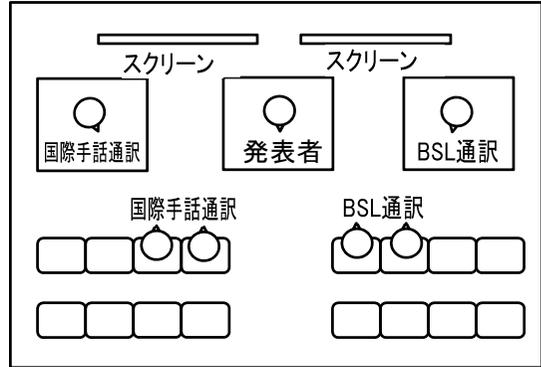


図1 発表者並びにイギリス手話(BSL)通訳、国際手話通訳の位置関係



図2 イギリスの聾者の発表への国際手話による質問場面（発表者はイギリス手話通訳を見ている。）

博士課程の学生で、将来、イギリス手話／英語の通訳者となること、あるいはイギリス手話や聾者に関わる問題の研究者を目指している⁶。皆、イギリス手話でのコミュニケーションが堪能であるように思われただけでなく、献身的に大会運営を支えていたことが印象深かった。

Ⅲ 第9回国際聾史学会のテーマとプログラムについて

1 大会テーマ「聾者スポーツの遺産」について

大会テーマは「聾者スポーツの遺産 (Deaf Sporting Heritage)」であり⁷、大会の目的は次のように書かれている。

大会テーマは、「聾者スポーツの遺産」である。聾者は、草の根からエリートのレベルまで、スポーツを大事にしてきた。本大会は、皆さんに、スポーツが聾者にとっていかに重要で影響があったかを深く知る機会を提供する⁸。

なぜ、「聾者は…スポーツを大事にしてきた」のか。これは、スポーツを通じて聾者が社会関係を持ち、競技を楽しみながら、手話や聾者の文化を育み、生活を潤いのあるものにしてきたからではないかと考える。本大会における「スポーツ」の捉え方を、国際レベルの競技スポーツに限らず、「草の根」レベルで行われる種々のものを含めているのはそのためであろう。

したがって、大会テーマの付記にも「スポーツ」の定義が次のように示されている。

本大会の目的のためのスポーツの定義は、次のようなものを意味し、またそれらを含む。すなわち、エアロビクス、体操、教練 (drill)、ダンス、ヨガやその他のフィットネスの活動、チェス及び卓上九柱戯 (skittles) のような「パブ」を使ったゲーム、室内外で行われる輪投げ (quoits)、コインはじき (shove ha'penny)、クリベッジ (cribbage) などである。

次に、研究発表のサブテーマ／カテゴリーである。本大会では表1に示す15のサブテーマ／カテゴリーが設けられ、研究発表のエントリーがあった29件は、そのいずれかに位置付けられた（1件は発表者の都合で取り下げられた）。下線で記したカテゴリーは、該当する研究発表があったものである。

日本から参加した聾史研究者の佐藤聖氏（聾者）は、「国民体育大会に参加した聾者」と題して、1935（昭和10）年の明治神宮競技大会⁹に参加した新潟県立長岡聾啞学校の生徒が、弓道で聴者の参加者と互角に戦ったこと、生徒達が弓道師範の指導を受けていたことについて報告した。昭和戦前期日本における聾者の社会への統合のあり様の一端を示す興味深い事例だと思われる。

表1 大会のサブテーマ／カテゴリー

- | |
|----------------------|
| ①聾者コミュニティにおけるスポーツの役割 |
| ②聾教育におけるスポーツの役割 |
| ③スポーツの機会と聾空間 |
| ④社会は聾者スポーツをどうみるのか |
| ⑤聾者スポーツの政治化 |
| ⑥聾者の健康福祉増進のためのスポーツ |
| ⑦聾児への教育手段としてのスポーツ |
| ⑧聾者スポーツを記録する |
| ⑨スポーツで功績を上げた個人 |
| ⑩一般のスポーツ界での功績 |
| ⑪マイナーなスポーツへの聾者の参加 |
| ⑫聾者のスポーツ組織—地方、国内、国際— |
| ⑬聾者スポーツの管理 |
| ⑭戦時中の聾者スポーツ |
| ⑮関連する他のカテゴリー |

2 興味ある研究発表

以下では、私に関心をもった二つの研究発表の概要を紹介したい。なお、内容を整理するにあたって依拠した情報は、当日撮影したスライド資料、ボイスレコーダーに録音した英語通訳の音声、ノートに書き残したメモである。

1) 聾者のスポーツ組織の誕生—地方レベルから国際レベルまで—

このサブ・テーマについて、オランダから参加したHenk Betten と Corrie Tijsseling両氏が連名により「オランダにおける聾者スポーツ—地方主導から国際的視野へ—」と題して発表した。Betten氏が、事実のレベルの報告をし、Tijsseling氏が理論的レベルでまとめ、研究課題を提示するというものだった。

オランダでは、1912年に聾者のサッカークラブが生まれたのをはじまりとして、その後、聾者のチェス、陸上、水泳などのクラブができていった。当時の聾者のスポーツで活躍した人は皆、ロッテルダム聾学校出身者であった。

Betten氏によれば、1924年に第1回の聾者スポーツの国際大会である国際サイレントゲームズ (International Silent Games) がフランスのパリで開かれた。それに刺激されて、陸上、ダイビング、射撃、サッカー、水泳、テニスなどのクラブができていった。1926年には、全国組織であるオランダ聾者スポーツ連盟が設立された。そしてオランダ聾者スポーツ連盟は、国際サイレントゲームズの第2回大会 (1928年) の開催地に名乗りを上げた。オランダの聾者は、それ以降、サッカーやチェスなどの国際大会に参加するようになっていった。

こうした事実経過の報告を受け、共同研究者のTijsseling氏は、オランダにおける聾者スポーツがこのように展開してきた理由は何かという問いを立て、次の3つの仮説を示した。

- (1) 聾者は自分達自身のスポーツクラブを必要とした
- (2) 聾教育が聾者スポーツに対して果たす役割があった
- (3) スポーツは聾者をつなげる：地方、国内、国際の各レベルで

まず(1)の1912年に聾者が聾者自身のスポーツクラブを必要としたのは、現実的理由と情緒的理由があったという。現実的理由は、当時のオランダの聾教育が口話法で進められていたことと関連づけて説明がなされた。すなわち、聾者は聾学校を卒業後は口話に依拠しながら聴者社会の中で働くことを期待されたが、コミュニケーションの壁に苦勞していたため、仕事が終わった後は、ストレスなくコミュニケーションが取れる場所を必要としていた。情緒的理由は、聾者は聾学校時代に寄宿舎で共に育ち、お互いを家族以上に知るような関係にあったから、卒業後も「家にいる」と感じられる必要があったという。

(2)の聾教育が果たした役割については、以下の点から歴史的調査の必要性を示した。すなわち第一に、聾学校の教師が生徒にスポーツをする動機づけを与えたのかどうかという点の検討 (そのような役割を果たした聾者教師の存在についても言及があった)、第二に、聾学校でスポーツをすることの教育上の目的、カリキュラム上の位置づけからの検討、第三に、聾者スポーツの形成におけるロッテルダム聾学校以外の聾学校との比較検討、そして第四に、聾学校のアンビバレントな態度、すなわち聾者の口話習得に基づく社会統合を重視する一方で、その困難さを認識し、聾者のよき生 (well-being) にとって聾者スポーツも大事だとする、聾学校の矛盾した態度につ

いての歴史的検討である。

(3)の聾者スポーツが聾者をつなげるという点については、聾者スポーツの国際大会が、各国の聾者の手話に対する見方や聾者としてのアイデンティティの在り方にも影響があった点を指摘する。すなわち、手話に対する見方の反転(=再評価)とこれに関わる聾者の解放の経緯は、1970年代の聾者のチェス国際大会の報告書の中に辿ることができるとし、聾者スポーツの国際イベントが、オランダを含む各国の聾文化、聾者のアイデンティティにも影響を与えてきたと指摘した。

最後に、このような事実経過を明らかにしそれに基づいて聾者スポーツについて理論的分析をする上で、史資料が残されていることが前提であること、そのために史資料を保存していくことの大切さが述べられた。

Betten と Tijsselingの両氏の発表は、聾者の視点によって掘り起こされた聾者スポーツに関する事実を整理し、聾者スポーツが聾者の生活、聾者としてのアイデンティティ形成に果たした役割、聾者スポーツと聾教育との関係を分析し、理論化していく試みに関するものであった。

2) 社会は聾者スポーツをどうみるのか

もう一つ興味をもった発表は、イギリスのStuart Harrison氏による「パラリンピックによる独占(monopoly)と聾者スポーツの周縁化」と題するものである。この発表は、Harrison氏が昨年公刊した著書“Same Spirit- Different Team: The Politicisation of the Deaflympics”(2014)の内容の一部である¹⁰。

1989年に国際パラリンピック委員会(IPC: International Paralympic Committee)が設立された時、国際聾者スポーツ委員会(CISS: Comité International des Sports des Sourds)は、その構成メンバーであったが、聾者スポーツの国際大会¹¹の独自性を保持するために1995年に脱退した。全日本ろうあ連盟スポーツ委員会デフリンピック啓発ウェブサイト(全日本ろうあ連盟[2013])によると、聾者スポーツの国際大会の独自性とは、「コミュニケーション全てが国際手話によって行われ、競技はスタートの音や審判の声による合図を視覚的に工夫する以外、オリンピックと同じルールで運営される点」である。

Harrison氏の発表は、障害者スポーツにおける「独占(monopoly)」という概念を用いて、国際聾者スポーツ委員会が主催するデフリンピックの社会的認知の低さ、財政的援助の少なさといった問題に、国際的な聾者スポーツのコミュニティがどう対処すべきなのかを問うものであった。

Harrison氏は、国際パラリンピック委員会が主催するパラリンピックの「独占」は、デフリンピックに次のような結果をもたらしているという。

- (1) デフリンピック、聾者スポーツの社会的認知の低さ
- (2) 国際オリンピック委員会による資金援助の欠如
- (3) 聾者スポーツに対する政府資金援助の欠如
- (4) 国内における聾者スポーツが受ける不平等
- (5) 観客とスポンサーの少なさ
- (6) 聾者のスポーツ選手への認知度の低さ

そしてHarrison氏はパラリンピックの「独占」の結果、パラリンピックこそが「全ての障害者をエンパワメントに寄与し、よりよい社会、よりインクルーシブな社会に寄与する」ものである

というのが社会の共通理解となっており、一方のデフリンピックは、こうした文脈での社会の理解を得るのに失敗しているという。氏によれば、この失敗とは「スポーツのレトリックを受け入れる (embrace) ことの失敗」である。

Harrison氏は、デフリンピックとその前身である世界聾者スポーツ大会は、「手話と聾文化」の価値を重視するアプローチに依拠してきたという。氏はこれを非競技的アプローチ (non-sports approach) という。Harrison氏は、そのために、聾者のスポーツ界は、スポーツエリートの高いパフォーマンスに焦点を当ててこなかったという。これは、オリンピックとパラリンピックが重視するスポーツへの科学的アプローチ (sports science approach) の軽視ということになる。

それでは、聾者コミュニティが、スポーツ界における社会的認知を取り戻し、社会への統合を目指すとしたら、その方策は何か。Harrison氏は、ロシアと台湾をその成功例として取り上げる。すなわち、ロシアの聾者スポーツ界は、聾者同士のスポーツにおける手話の大切さを保ちながら、生き残っていくために、「口話主義」(“oralism”) 及びより広範なコミュニティの人々と協働することを受け入れた。ロシアはそのようにして、国家からも財政的支援を受け、獲得メダル数の上でも最多を誇っており、氏は、この財政的支援と獲得メダル数には相関があると主張する。

台湾は、2009年のデフリンピックの開催国である。筆者の理解したところでは、台湾の聾者スポーツ界は、国内において台湾オリンピック委員会との関係を保ち、台湾オリンピックの開催のための努力において、聾者スポーツを利用することを認めた。すなわち、台湾の聾者スポーツ界は、デフリンピックの開催国となることが国民全体に社会的・政治的利益となることを示すことにより、メディアにも多く取り上げられ、デフリンピックを成功裡に終えることができた。Harrison氏の主張をその著書 (Harrison[2014]) に確認すれば、台湾は「デフリンピック、聾文化、手話の概念を理解し、デフリンピックが全ての人にとってのエンパワメントの形態としての可能性をもつことを理解することができた」(Harrison[2014]185) のである。

最後にHarrison氏は、ロシアや台湾のとった方策とそれがもたらした結果の歴史に学び、国際聾者スポーツ委員会が、将来において、国際パラリンピック委員会に加わらないままであれば、国際的障害者スポーツの世界において益々周縁に置かれるだろうと問いかけ、発表を終えた。

Harrison氏の発表は、障害者スポーツの世界における「独占」と聾者コミュニティの周縁化について扱ったものであるが、社会のさまざまな場面に聾者が参加していく際に生じる諸問題とそれへの対処方策について考えさせるものである。

3 エディンバラの聾史に関するワークショップと徒歩ツアー

本大会のオプションのプログラムとして、エディンバラ出身の聾の画家Walter Geikieの作品に関する小ワークショップが、大会開催に先立ちCity Art Centerで開かれた。また、エディンバラ聾史遺産徒歩ツアーが大会前日、大会3日目及び4日目の3回行われた。後者では、“Deaf Edinburgh: The Heritage Trail” (Hay[2015]) の著者でもあるJohn A. Hay氏が、イギリス最初の聾学校であるBraidwood’s Academy for the Deaf and Dumb (1760年に1名の聾児の教育から開始) が始まった場所やイギリス手話研究の始まった場所などを詳細な解説とともに案内をしてくれ、エディンバラの聾史への興味を大いにかき立てられた¹²。

IV おわりに

1 当事者による聾史研究の意義

最後に、聾史研究を当事者の視点でおこなうことの意義と聾史研究への期待について、私の見解をまとめたい。

まず、当事者による聾史研究の意義は、次の三点にまとめられる。第一は、聾者がどのように生きてきたかを知る上で、聾者であることがアドバンテージであるという点である。すなわち、聾者は、聾者コミュニティとつながりを持ち、その中で手話によって語り継がれてきた情報に、手話でアクセスしやすい立場にある。確かに、歴史研究一般においても、文字資料やモノとして残された資料だけでなく、口述による資料も重要な情報源であるが、手話そのものが書記媒体をもつ言語ではなかったために（映像による記録はあるが）、聾史研究における口述（手述）資料のもつ意味は、より重要である。

第二は、歴史の中に確実に存在した聾者の視点を掘り起し、歴史の舞台の中に位置づけていくことである。社会の人々や教育者が聾者をどう見てきたのかという視点ではなく、その時代、社会を聾者がどのように認識し、生活を築いてきたのかについて歴史的想像力を働かせる上で、聾者としての生活経験は大切な要素であると思われる。その時代・社会の制約を受けながらも、聾者が主体的に生きてきた姿を知ることは、今日の聾者が自身の生活をどのように捉え、どのように生きていくのかを考えることにもつながる。すなわち、聾者による聾史研究は、聾者にとってのエンパワメントの視点と重なるのではないかと考える。本大会でも、BettenとTijsseling両氏の研究を含め、このような意義を感じられる研究の発表が多かったと思われる。

第三は、聾史研究を国際的視野でおこなう意義についてである。聾者のコミュニティや手話、聾教育の歴史は、国際的に共通する要素もあるが、文化的・社会的条件の違いによって、それらに対する社会の受容の仕方も異なる側面があると思われる。聾史研究の国際学会の意義は、第一、第二のような視点を共有しつつも、国や地域による文化的・社会的条件の違いを視野に入れながら、人類史における聾者と聾者を取り巻く社会の在り方の共通性とともにも多様性を理解していく点にあるのではないか。

2 聾史研究の課題

聾史研究の課題について、二点述べたい。第一は、聾史研究が、従来の様々な分野でおこなわれている歴史研究に対して、どのような新しい問題提起ができ、貢献できるのかが、より明確になっていく必要があるのではないかということである。この課題は、インクルーシブな社会において聾者スポーツがどのような貢献をできるのかという、Harrison氏の問題提起とも通ずるものである。筆者の関心のある聾教育史の分野についていえば、専門家主体で叙述されてきた歴史に対し、聾者の視点に立った歴史研究がいかなる新たな歴史的解釈、叙述を可能にするのかが明らかにされる必要がある。

この課題を乗り越えていくために、聾史研究が歴史研究にかかわるより多様な立場の人々によっておこなわれるようになることを第二の課題として挙げたい。すなわち、上述した当事者による聾史研究の意義を大前提として捉えつつ、その前提を共有しうる多様な立場の歴史研究者が聾史に関心を持ち、それぞれの人がもつ研究の視点、方法、アイデアを寄せ合って、聾史研究を協働で発展させていく方向性が大切なのではないか。つまり筆者は、聾者でない歴史研究者が

聾史研究に関心をもつことも、聾史研究の発展にとって大切であると考えている。

日本では、1998年に設立された日本聾史学会が毎年研究大会を開催しているだけでなく、近畿地方、関東地方、東海地方、北海道など、地域ごとに聾史に関する地道な学習会、研究会の活動がおこなわれている。今後もこうした地道な学習・研究活動が積み重ねられていくこと、そして、さまざまな歴史研究に携わる人が聾史に関心をもち、それらの人々と聾史研究者との間で対話がなされていくことで、日本の聾史研究から国際的学界に発信しうる知見が生み出されることを期待したいし、筆者もこうした学習・研究活動に加われたらと考えている。

付記

第9回国際聾史学会への参加は、科学研究費助成事業・学術研究助成基金助成金・若手研究(B)「日本の聴覚障害教育における口話法導入の教育的・社会的基盤」(研究代表者:佐々木順二)にかかるとなる研究活動の一環としておこなったものである。

文献

- Harrison, Stuart R. (2014) *Same Spirit Different Team: The Politicisation of the Deaflympics*. UK: Action Deafness Books.
- Hay, John A. (2015) *Deaf Edinburgh: The Heritage Trail*. UK: British Deaf History Society.
- 亀井伸孝 (2009) 手話の世界を訪ねよう. 岩波書店.
- ブリッチャード, D. G. / 岩本憲訳 (1969) 障害児教育の発達—十八世紀から二十世紀まで—, 黎明書房. (原書 Pritchard, D. G. [1963] *Education and the handicapped, 1760-1960*. Routledge & K. Paul)
- The Editor (2015) Want to be a BSL Interpreter? (Heriot-Watt University's Advertisement). British Deaf News, February, 2015.

Web ページ

British Deaf History Society, Board of Directors.

URL: <http://www.bdhs.org.uk/about-us/board-of-directors/> (2015年9月17日アクセス)

Deaf History International (2014) Conferences—Past and Futures.

URL: <http://www.deafhistoryinternational.com/conferences/> (2015年9月17日アクセス)

Deaf History Scotland & British Deaf History Society (2014) Theme (9th Deaf History International Conference). URL: <http://www.dhi2015.com/conference-information/theme/> (2015年9月17日アクセス)

全日本ろうあ連盟 (2013) デフリンピックの概要.

URL: <https://www.jfd.or.jp/deaflympics/games/about.php> (2015年9月17日アクセス)

注

- 1 これまでの国際聾史学会の大会開催地と開催年は次のとおりである：第1回ワシントンD.C.（アメリカ合衆国、1991年）、第2回ハンブルグ（ドイツ、1994年）、第3回トロンヘイム（ノルウェー、1997年）、第4回ワシントンD.C.（アメリカ合衆国、2000年）、第5回パリ（フランス、2003年）、第6回ベルリン（ドイツ、2006年）、第7回ストックホルム（スウェーデン、2009年）、第8回トロント（カナダ、2012年）、第9回エディンバラ（スコットランド、2015年）。第10回大会は、2018年7月にシドニー（オーストラリア）にて、「聾史における植民地主義（colonialism）」をテーマに開催予定である（Deaf History International[2014]）。
- 2 イギリス聾史学会の理事会一覧より（British Deaf History SocietyのWebページより）。
- 3 同じ英語が話される国であるが、イギリスとアメリカ合衆国とは手話の体系が異なる。その違いの一つが指文字であり、アメリカ手話ではアルファベットを片手の形、動きで表すが、イギリス手話では両手の形、動きの組み合わせで表す。イギリス手話の指文字の基礎は17世紀のスコットランド人George Dalganoが作り出した指話指文字にあるという（ブリッチャード[1969]10）。a e i o uの5つの母音のアルファベットは、片方の手の5本の指をもう片方の手の人差し指で指し分けることで区別する。
- 4 手話は、世界共通ではなく、国・地域によって独自に生まれてきた、それぞれ固有の体系をもった言語である。亀井（2009）によれば、今日、世界では119種類の手話言語が聾者によって話されている（p.147）。
国際手話とは、異なる言語体系の手話話者同士が意思疎通をはかるために考案された共通の手話単語の集まり（signs）であり、世界ろう連盟の会議やデフリンピックなどの聾者の国際交流の場で用いられる。
- 5 このオランダ手話の通訳者は、自国ではオランダ手話とオランダ語の変換を仕事としていると思われるが、今回の国際学会の文脈では、媒介する音声言語が英語であるため、オランダ手話と英語との変換が主な仕事であったと思われる。つまり、自国語と英語の通訳能力をも有することで可能となる通訳といえる。
- 6 学士課程の学生は大学3年次よりコミュニティの中の種々の組織に配属されて実務経験を積み、4年次からは手話通訳の仕事にも従事するとのことである。この4年制課程は、2012年9月に開設された（The Editor[2015]）。このように大学で手話を言語として学び、その通訳技術を習得する課程があることは、言語としての手話の社会的認知度を高める上でも大切なことであろう。
- 7 過去の大会テーマを国際聾史学会のホームページに見れば（Deaf History International[2014]）、次の通りである。
第1回 テーマ無し
第2回 メインテーマは無かったが「聾者」「聾コミュニティ」「手話」「学問としての聾史」「聾教育」のテーマごとのブロックあり
第3回 「芸術と科学における聾者」
第4回 「聾者の歴史の研究、保存、教育」
第5回 「過去の達成と将来の展望」
第6回 「過去の超克：歴史的帰結への判断と解決策の模索」
第7回 「過去なくして、将来はない」
第8回 「聾者の生を伝える：伝記と自伝」
- 8 第9回国際聾史学会ホームページのテーマより（Deaf History Scotland & British Deaf History Society[2014]）。
- 9 国民体育大会の前身となる総合競技大会で、1924（大正13）年～1943（昭和18）年まで開催された。
- 10 Harrison氏は、本学会で本書の内容から次の報告も行った。「1989年デュッセルドルフ会議から1995年国際聾者スポーツ委員会（C I S S）まで—国際聾者スポーツ委員会の国際パラリンピック委員会からの脱退にまつわる秘話—」
- 11 競技スポーツの国際的祭典の代表はオリンピックであり、障害者の競技スポーツの国際的祭典であるパラリンピックは、オリンピックと密接なつながりを持ちながら同時開催される。ところで、パラリンピックには聾者が参加できる区分はない。一方、国際聾者スポーツ委員会が主催するデフリンピックが、4年に一度、オリンピック及びパラリンピックの開催年とは2年ずれる形で開催されている。その起源が、1924年にパリで開催された国際サイレントゲームズである。
- 12 John A. Hay氏はイギリス手話で解説し、外国の聾者にはイギリスの聾者が国際手話に翻訳をした。また、私を含め少数の聴者の参加者に対しては、イギリス手話／英語の通訳者が最後まで同行してくれ、十全に参加することができた。